

道後温泉から福角・高橋家へ

二〇〇〇年六月五日にはじまった伊予路の旅。その後半の疲れを予測して、四泊目は道後温泉の湯に浸かる計画をたてていた。かんぼの宿・寿苑は温泉街から石手寺(四国霊場第五一番札所)を抜けたあたりの高台にあった。町並みの向こうに浮かび上がる松山城の眺めが気に入った。いや、いまは目に映るもの、手に触れるもの、すべてが気に入ってしまう。それほどに満ち溢れるこの充実感。



高台にある「かんぼの宿・寿苑」

温泉街の向こうは松山城

福角の権現川

■本貫・河原田中家訪問への助走

残念ながら、箆笥の中身は、期待したほどの収穫はなかった。美枝さんに持ち出してもらった曾祖父・長五郎への封書の中身は、出入りの酒屋からの通い帖にすぎなかった。

ぼくらが二階に上がっている間に、手渡したばかりの『汝、風早へ急ぎ往け!』のコピーにアイコ刀自は目を通していたようだ。詳しくは語りたがらなかったが、祖父重吉の生家である田中家とは、現在ではほとんど行き来がないようだった。表通りで古くからタバコ屋を営んでいたが、現在の菊夫氏の代になって廃業したという。

田中家がタバコ屋を営んでいたとは、初耳だった。戦前にタバコ販売の看板を持つためには、かなりの財力と信用がないと、国からの許可がおりないはずである。そうだったのか、と安堵する想いがこみあげてくる。

さて、そろそろ、田中家にコンタクトしてもよい潮合となったようだね。「かんぼの宿」の温泉に浸かりながら、おのれに語りかけた。三大古湯にあげられる道後の湯は、柔らかなぬめりを感じる透きとおったものだった。鈍川温泉のそれも同質だった。

翌日は四国に来て、初めての雨に見舞われた。湯月城址のある道後公園を歩きたかったが、足場が悪く、断念した。やっぱり、福角へ行こう。踏んぎりがついた。

その前夜、北九州の嶋津良枝(従姉)に「途中経過」を報告するため電話を入れたところ、先方には話がついていて、いつ来るのか待ってくれているそうよ、と励まされてしまった。それがなけ

れば、福角をパスしていたかもしれない。「先方」とは松山市福角に住む高橋憲一さんのことで、良枝さんの母親シナヨさんの縁戚だという。そこを訪ねれば、とアドバイスしてもらっていたのだ。謎解きにかかわる重要な分かれ道だった、と今にして気づく。

松山の中心地を抜ける。堀江の町の左手は、海がそこまで迫っていた。右手は瘤のような形をした低い山並みが連なる。かつては山城だったろう。まずまずの川幅をもつ、流れの元気な川にぶつかったので右折してみる。標識から、突き当たると「権現温泉」と知った。



憲一さんのお隣でひるひる回帰へ踏み出す



権現川沿いの福角・高橋邸の行まい

高橋憲一さんが待っていてくれた。声の大きな、元気な老人だった。かつては九州筑豊の炭鉱町・直方の正岡順吉家(父・徳一の長兄)と行き来があり、その親戚筋に、順吉の妻シナヨ(福角六拾六戸主乗松吉蔵孫・明治二九年生まれ)との関わり程度の認識だったのが、憲一さんと話しているうちに、急展開を見せた。この旅の本来の目的である、父方の本貫である「河原・田中家」へのつながりを得たのである。

それが、憲一さんの祖母に当たる「ウタ」の存在であった。

二つ年上の姉・ウタの存在

高橋家の当主・憲一氏と、そのあとの田中家訪問でインプットした話を一つにすると、以下のようなストーリーが浮かび上がった。てきた。

明治十七(一八八四)年四月三〇日、田中利平の次女、ウタ(文久三年「一八六三」七月七日生まれ)は、粟井村河原から今治街道で粟井坂を越え、松山に入ると直ぐの村、福角村の高橋竹蔵のもとへ嫁いだ。ウタは重吉の二つ上の姉であった。

■明治から大正にかけての「愛憎劇」

高橋竹蔵は福角きつての大地主・覚蔵の次男で、ウタを妻に迎えるに当たって、分籍した。このウタが、わたしの「風早へ久

万山へ」探訪譚の鍵を握るヒロインのひとりである。高橋家の「改製原戸籍」でも「除籍簿」でも、ウタは「田中喜（嘉の誤記）蔵次女」となっている。これは戸籍吏の明らかな記載ミスで、田中嘉蔵は明治十三年に父・利平より家督を相続しており、「嘉蔵ノ妹」とするのが正しい。なお、嘉蔵・重吉の兄弟には「ツル」という妹もいる。気の強い女性で興居島に嫁入りしたが、舟に揺られるのが嫌だといって、その足で嫁ぎ先から、河原の実家にかえってしまっただけだ、という。



高橋家の居間に飾られているウタの肖像

この田倉神社を中心に高橋一族の墓がある



ここで、戸籍に刻まれた記述から、一つの愛憎劇が透けてみえる。嘉蔵は、最初の妻ヨウを明治二十一年に迎えている。「当県和気郡福角村高橋久蔵長女」とあるが、ウタの嫁いだ高橋家の縁戚かどうかは、高橋家の戸籍からははっきりしない。そして一年後、ヨウを福角村へ追い返している。「福角村」は、河原から松山へ向うと、難所の栗井坂を越えた最初の村落である。ヨウの抜けた穴は、同じ河原の田中糸次長女のチヨが埋め、サカエ、カヨ、トクヨと三人の女の子を立て続けにもうける。

チヨは明治五（一八七二）年生。わが祖母のクラと同年。恐らく、幼馴染に違いない。が、明治三〇（一八九七）年、嘉蔵が三六歳で他界すると、三人の娘を置いたまま、すぐ隣りに住む田中権七のもとへ走る。

村の古老の話によれば、権七の家系は周りから、淀んだものがある、と敬遠されてきた、と言い伝えられる。にもかかわらず、チヨは海辺の小屋で権七と世帯をもった。「鬼のような女」とツル女が吐き捨てるように非難し続けた。業に近い愛憎の渦が、そのころの河原・田中家を揉み苦茶にしていた。

わが祖父・重吉はその当時、西明神の養家先にいる。けっして無縁ではないはずだが、さて。

福角の高橋ウタはすぐに長女のアサを産んでいる。そのアサが長じて、「温泉郡久枝村・東長戸」の門屋嘉十郎に嫁ぐ（明治三

九年)。長男、士寿雄。その士寿雄が妻に迎えたのが、田中サカエの長女・ヤス子(大正二年生)である。



のちに貴重な家族写真を入手。前列右で幼女を膝におくのがサカエ方自

サカエは菊間の瓦職人だった渡部岩吉を養子に迎え、田中家を守っていたのである。サカエの長男・次男は夭折し、三男の菊夫(大正一〇年生)がその跡を継ぐのだが、姉のヤス子の婚家・門屋家から四女のちよ美(大正一四年生)を妻に迎えている。俗に言う「替え縁」である。

この菊夫・ちよ美の夫妻が現在の「河原・田中家」を守り、育

ててくれたからこそ、故郷を飛び出してから八〇年を経た一族の本貫帰りが、果たせたのである。

■筑豊直方と風早郷との中継地だったのか

祖母クラが四国へ帰ったときの基地を福角・高橋家とした理由が、やっと理解できた。ウタの存在にあったわけである。そして、憲一さんとぼくとの関係は、「従兄弟同士の子」ということが分かった。

ついでながら、この訪問の際、「高橋家系図」を拝見できたので、高橋家のプロフィールの一環として、その最初の部分を採録しておく。作成期はそれほど古いものではない。

「高橋家系図」 家紋 橘 遠祖 藤原鎌足

高橋家は旧堀江村福角田倉宗有禅定門に始まる。その祖は遠く四百余年前 伊予豪族河野氏なり 天正十三年豊臣秀吉に滅ぼされ 葦草生い茂る福角の地に住み着き 田倉と云ふ 代々称名を高橋一族と云ふ 氏神を墓地の茲に安置し 紀州熊野権現を勧請し 田倉十二社権現として尊崇し 産土の神として毎年旧七月二十七日に祭祀す 天保年間 松山藩士との交流・婚姻あり 其の祖神の数 八十余基 延享・天和・天明の古

墳 昔日を伝ふ こうした堀江村福角の旧家に、明治一七年、風早郡河原村から嫁いだのが、田中嘉蔵の妹ウタであった。

このあと、憲一さんの案内で、父の長兄・順吉の妻・シナヨの実家である乗松家にも案内された。家人は、何度か直方まで招か



北九州訪問の記憶を語る乗松スガエさん母子 北条方面を臨むと瘤のような山が連なる

かれ、舞踊に使うきれいな着物を土産にもらった、と懐かしがってくれた。最後に憲一さんは電話機を取り上げた。河原の田中家へ連絡を入れたのである。

「九州から、親戚の正岡さんが見えとるがあ。そっちへ行っても

らうぞな」

ポンと背中を押してくれた。

本貫・河原田中家に「還る」

■あなたに逢いに行きます

高橋憲一さんがいてくれたお蔭で、わが本貫・河原田中家への道筋が開かれた。表通りまで見送ってくれた憲一さんに北東を指さしながら、問う。

「あの瘤のような山は？」

「わしら、城山、いとうりますがのう」

福角から河原へは、いったん堀江に出て、海沿いの幹線、一九六号線から粟井坂を抜けて旧風早郷に入っていくのが、これまでの正常のルートだが、平成に入ってから高橋家のある辺りを基点にしてバイパスが粟井坂の下にトンネルをくぐらせ、北条方面へ抜けていた。

粟井坂の右手前に位置する瘤のような山の連なりが気になった。あとで調べてみると、それが「葛籠屑(つづらくず)城」という、伊予史に何度か登場する動乱の舞台だった。たとえば、平安中期には藤原純友が海賊追捕の拠点にしたのがはじまりで、海からの攻撃に備えて造られた山城だ。河野氏の重要拠点のひとつで、

戦国期には、織田軍の攻撃を河野勢はここで押し返している。が、後日、城主・村上吉高が織田側に寝返った来島通総と通じて謀反を謀っているとして、肅清される。葛籠屑城炎上。切腹。その痛切な吉高の最期は、いまに語り継がれているほどだ。

すぐにでも、バイパス経由で河原へむかいたかったが、ここは海沿いの正規ルートである一九六号線から風早郷に入ることにしたかった。権現温泉から堀江に出る川沿いの道が大きな池のそばを抜けていた。ふと見ると、ボイラーメーカーとして全国的に知られる「三浦工業」の社屋が池の面に映り込んでいる。隣り合わせた小高い丘が、花見山城跡であった。ここでは平野から盛り上がった丘や山はすべて城塞があった、と思っていられない。



葛籠屑城址を風早側から見る



旧今治街道に面した河原・田中家 モダンな二階建て

松山道後温泉から街中を抜け堀江に着いたときと同じ地点に出た。ここから栗井坂へ向かって北上すれば、風早郷に入るわけである。一九六号線はすぐに海沿いの道に合流した。ここからは興居島などが庇ってくれなくなつて、瀬戸の海から吹き付ける風が、突然強くなると聞いていた。「風の色が変わる」とも表現されている古くからの街道を一組の若い女性が白装束の菅笠を被つて、ひたひたと北上していた。ここは四国遍路道のうち、第五三番札所・圓明寺から第五四番近見山延命寺の間の当たるといふ。軽く会釈を送つてヴィッツで追い越した。

小さな岬の先端は「海鮮北斗」という割烹風の構えをしたレストランになつていて、向かいが栗井の太子堂と、栗井坂関所跡へ通じる旧道が、草むらの中を登っている。松山方向を振り返ると、先刻、憲一さんが「城山、いうとりますがのう」と答えてくれた、瘤のような山が間近であつた。ああ、これが葛籠屑城址だったのか。

かつては小さな漁村だった名残が街道筋に点在していた。マリオン関係のドックやショップがポツンポツンと続く。小川、磯河内、和田を過ぎ、いよいよ河原の集落に入った。海側に輸入家具のショップと喫茶レストラン。そして、このあたりでは珍しくモダンで、スッキリした佇まいの二階家。そこが河原の田中菊夫邸だった。

鉄製の黒塗りの門扉。それが格子柄でしつらえてあるデザインだから、玄関が透けて見える。敷石の両側を白百合とガーベラの鉢植えが並んでいて、来客への心配りがうかがえる。

呼び鈴を捺す。ゆつたりとした女性の声音が応える。ガラス戸が開かれ、眼鏡をかけた老婦人が、温かい笑顔をこちらに注ぐ。田中ちよ美さんとの最初の顔合わせであった。



磨き抜かれた仏壇 家人のご先祖を祀る気持が伝わる 出迎えてくれたちよ美夫人

挨拶はあとにして、まず、仏壇に線香をあげさせていたたく。つい、声を出してしてしまった。ご先祖の位牌に聴いてもらえるように。

「お祖父さん、そしてオヤジさん、やっとなどり着きましたよ。ここがあなたがたのご本家です。よかったね」

壁側にきつちりはめ込まれた仏壇。燈火を絶やすことのない家の心映え。豊かな、どっしりとした暮らしぶりがにじみ出ている。奥の座敷に通された。

西明神の正岡家、河原の渡部家をはじめ訪れたときと同じように、こちらの礼儀として、それまでに取得できた「除籍原本」を見てもらうことからはじまった。

祖父の重吉が「正岡姓」ではあるが、父が田中利平、兄に嘉蔵をもつ、紛れもなく河原・田中家の出であることを、まずちよ美さんに確認してもらった。

ほっとため息を一つ、ちよ美さんが漏らす。眼鏡の奥が潤んでいる。

「これまで、九州の方に親戚があることも知らなかったのを、福角の憲一さんに連絡をもらって、どういふことかと思っていました。これで判りました。ご先祖様、すみません。あなた、よう調べてくれましたなあ」

そのお札の言葉に応えるべく、当初『汝、急ぎ風早に往け!』と題した、わがルート探しの記録をコピーしたものを手渡す。多分、わが祖父・重吉と父・徳一が北九州・直方に渡ってから一〇

○年近くが経っているが、それ以来の帰郷ではなからうか。

【註・河原田中家の原戸籍は《第三部の第一章》で紹介】

「お願いがあります」と、こちらから切り出したのは戸籍謄本の取得についてであった。

「今、ご覧いただいたのは、除籍原本です。祖父の重吉は、明治二六年に西明神の正岡家に養子に行ったため、ここから先の《改正原戸籍》を取得するには、当家の同意が必要なんです」

なるほど、という顔でちよ美さんは、改めて手にした戸籍に見入ってから、

「判りました。よう、ここまでお訪ねいただいたあなた様を、信用しましょう。で、どうすれば……?」

持参した「同意書」の捺印をいただく。すぐに北条市役所へ向かった。窓口には最初の日に応対してくれた、あの目元の涼しい青年がいた。あとで「正岡泰式」と名乗ってくれた。実家は旧正岡村の中西外だという。

手元に「改正原戸籍」が届いた。祖父の実兄・嘉蔵の長女、サカエが渡部岩吉を養子に迎えて以降の「河原・田中家」の具体的な顔が、やっと見えてきた。三男菊夫（長男と次男は早逝）と、その妻ちよ美の名が、この段階で登場してきた。

再び河原・田中家に。当主の菊夫さんが外出から戻っていて、

柔らかい笑顔で出迎えてくれた。



田中菊夫・ちよ美夫妻と一緒に